

No.171

2013.
3.22

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111

科学教育への取り組み

岐阜市科学館館長 小森 龍二



岐阜市科学館は、岐阜公園に昭和30年に開館した「岐阜市児童科学館」を前身とし、昭和32年には岐阜県で第一号の登録博物館、昭和55年に現在の地で「岐阜市少

年科学センター」として開館、その後、プラネタリウムを併設したのを機に、名称を「岐阜市科学館」と改称して現在に至っています。

岐阜市は教育立市を施策に掲げ、平成24年度は科学教育に重点を置く方針を取っており、岐阜市科学館としても新規事業をいくつか立ち上げました。

科学とは自然界の事象について、なぜという疑問を持ち、仮説を立て、観察や実験を通して結論を導く学問です。そのため、探究心や創造力が重要となります。つまり、知識だけでなく、考える力を必要とする学問だと言えます。

現在は情報化社会で、インターネットを使えば簡単に知りたい情報が手に入ります。しかし、科学に興味関心を持ち、科学を楽しみと感じ、科学の本質を身に付けるには実体験が必須です。実験・観察が伴わない理科教育は単に知識の受け売りであり、考える力を養うことはできません。まさに、現在のつめこみ型受験勉強がそうです。今こそ科学教育によって思考力を伸ばしていくことが必要なのではないでしょうか。

小学校低学年の児童は、生き物の飼育が好きだったり、色が変わる化学実験に興味を示したりと、理科好きな子どもがたくさんいます。ところが、小学校高学年や中学生になるにつれて理科嫌いが増えてきます。これは、物理などの理論的

な分野が入ってきて難しいと感じたり、受験のための味気ない授業になっていたりするためではないでしょうか。また、以前は時計やラジオを分解すると、その仕組みが理解できたのですが、現在は科学技術の高度発展により、すべてICチップひとつで賄うことができてしまいました。このため、仕組みや原理を知ることができなくなってしまったのも原因の一つかもしれません。ノーベル賞受賞者の名古屋大学特別教授・益川敏英氏は、これを「科学疎外」と表現されました。

当館では、参加体験型の展示装置により、楽しみながら科学に親しんでもらう常設展示や科学教室などの教育普及事業を展開してきました。そして、今年度からは新規に「ぎふサイエンスフェスティバル」「ぎふスターウォッチング」「岐阜科学塾」の3つの事業を立ち上げました。前2つは広く市民に科学への興味関心を持ってもらう事業であり、3つ目は、理科好きな児童生徒にハイレベルな科学体験を提供して将来の科学リーダーを育成しようという事業です。

「ぎふサイエンスフェスティバル」は益川敏英氏の講演会や大学、高専、高校、NPO法人などの協力による科学実験工作ブースを出展するイベントで、「ぎふスターウォッチング」は毎月第4土曜日にJR岐阜駅前広場で開催する天体観望会、「岐阜科学塾」は大学や高校で高度な科学実験などを受講する講座です。いずれも、多くの参加者があり、市民の科学に対する意識が高いことがわかります。

今後も市民ニーズに応えるような事業を展開し、地元の科学に対する土壌の醸成を図り、ゆくゆくは岐阜からノーベル賞受賞者を輩出することができればと夢を描いています。

第37回東海三県博物館協会研究交流会報告

期 日：平成24年11月29日

場 所：岐阜県美術館

参加人数：57名

第37回東海三県博物館協会研究交流会が、11月29日（木）に岐阜県美術館にて開催されました。今回は、「観光商品としての博物館・美術館」というテーマで、基調講演と事例発表をしていただきました。

■ 基調講演

観光商品としての博物館・美術館
近畿日本ツーリスト株式会社
地域誘客事業部 課長 池田幸二

博物館・美術館には様々なお客様が訪れますが、その一つに旅行会社が主催するツアーに参加して来館するという形があります。今回の研究交流会では、実際に博物館・美術館をコースに含めたツアーを企画する旅行会社の視点から見た観光商品としての博物館・美術館についてお話をいただきました。

はじめに、観光地域づくりに必要な3つのことをご説明されました。一つめは、目的やテーマにストーリー性がある滞在プランを構成することです。そして、一度訪れた方が、何度も訪れたいくなるような仕掛けをつくることです。二つめは、地域が一体となった情報発信・商品販売を行うことで、市場に情報や商品が届くようにすることです。三つめは、地域が観光客と長く結び付くための取り組みをすることです。そのためには、現在訪れているお客のニーズを把握し、目指すべき方向性を決定し、対象とする客層に直接的に伝え働きかけることが重要です。

次に、バスツアーの旅行者のニーズに共通しているキーワードとして「新名所」「限定感」「特別おもてなし」を提示され、いくつかの事例を紹介されました。さらに魅力ある商材とする要点を教えてくださいました。

観光資源になり得る素材に、いかに付加価値を付け、魅力のあるものに組み立てていくかという手法を具体例とともに聞く機会は大変貴重なものでした。

■ 事例発表

エンターテインメントな教養空間への挑戦
大垣市奥の細道むすびの地記念館
学芸員 大木祥太郎



観光を核にしたまちづくりを進める大垣市に昨年、奥の細道むすびの地記念館が開館しました。

はじめに、大木氏は、当記念館が文化・学術施設と観光・まちづくり施設を一体化し、大垣の地域ブランドを総合的に耕すことをコンセプトにしていることをご説明されました。

次に、近世紀行文学の傑作である「奥の細道」を深く読み味わえる芭蕉館の展示や、展示と連動し解説文を書き込むことでオリジナルの「奥の細道」解説図録を作成できる「図録ノート」などを紹介され、より奥の深い教養を来館者自らが作り出す仕掛けがあることをお話しされました。

また、当記念館には観光協会事務局が設置され、観光・商工部や観光協会との連携を推進する具体的な方策を3点述べられました。一つめは、観光旅行業者やバス会社との連携です。業者向けにツアーガイドを作成したり誘客奨励金を設けたりしています。二つめは、他自治体との連携です。奥の細道サミットによる関連市町との連携を深めています。また、当記念館の観光交流館に西美濃ゲートウェイ機能をもたせ、ここから旅を始めよう、と提案しています。三つめは、観光客への発信です。水都旅（すいとりっぷ）等のフリー雑誌との連携を進めています。展示の魅力だけでなく、水都おおがき芭蕉隊による宣伝活動や普及活動も紹介されました。

講演を拝聴して、地元の方に愛される施設であることが地域ブランドづくりに欠かせないことを感じました。

（機関紙委員 岐阜県博物館 酒井立人）

第60回全国博物館大会に参加して

期 日：平成24年10月25日～26日
場 所：秋田キャッスルホテル

第60回全国博物館大会が、「再生」をテーマとして、平成24年10月25日～26日の二日間にわたり秋田市の秋田キャッスルホテルで開催され、全国から300余名が参加しました。

記念講演では、近藤文化庁長官が、「これからの文化芸術の役割」と題して講演されました。そのなかで、今後は、アートマネジメントの体制を確立することが急務であり、そのために博物館が果たすべき役割は大きいことを指摘されました。

次に、全体シンポジウムでは、「再生を支えるネットワーク」をテーマに、美術館、自然史系博物館、歴史民俗系博物館の各全国ネットワークの事務局を担っておられる方々をパネリストとして、それぞれの組織の活動実績の紹介などがされました。東日本大震災においては学芸員の個人間のネットワークが大いに力を発揮した一方で、組織的な取り組みという点ではどうあるべきなのかについて意見交換がされました。



二日目は、「博物館のリスクマネジメントを見直す」、「小中学校の来館に向けて」、「新しい博物館の取り組み」の3分科会が開催され、私は、「博物館のリスクマネジメントを見直す」に参加しました。

ここでは、秋田県立博物館副館長の工藤裕氏の司会で、東京国立博物館保存修復課長の神庭信幸氏、第一成和事務所営業部営業一課の青木裕介氏が発表されました。

最初に司会の工藤氏から、秋田県立博物館の危機管理マニュアルが紹介されました。その後神庭氏から、文化遺産の保全に対する危機対応という新しい見方の必要性について、また青木氏からは、保険業務の観点から、リスク・コントロールについて発表がありました。

それぞれ大変参考になる発表でしたが、特に神庭氏の、例えば膠生産が激減し伝統美が喪失の危機にあることや、ヴァーチャル技術の発達文化遺産の保全にもたらす影響など、文化遺産を取り巻く様々な状況変化を踏まえ、文化財保全に対する危機対応という新しい見方の確立と解決策の創出が必要という提言が印象に残りました。

その他、行政報告、全国博物館会議等が行われ、最後に、大会決議を採択し閉会しました。

ところで、次の第61回全国大会は、今秋、11月7日（木）～8日（金）に岐阜市のじゅうろくプラザで開催されます。

岐阜県は、「日本の博物館の育ての親」とも言われている棚橋源太郎博士の故郷です。先生は、現在の日本博物館協会の前身である「博物館事業促進会」創設の中心的存在であり、博物館法制定にも尽力されるなど、日本の博物館の発展に多大な貢献をされました。

その岐阜の地で、全国の博物館関係者が一堂に会する全国博物館大会が開催されることは感慨深いものがあります。

今大会では、情報交換会の場において若宮岐阜県博物館協会会長が、また、閉会式に際しては私から、会場の皆さんに多数来岐されるよう呼びかけました。

どうか今秋開催される全国大会が実りある大会となりますよう、会員の皆さまの絶大なるご協力をお願いいたします。

（岐阜県博物館 館長 河合正明）

福井康雄氏天文講演会 実施報告

期 日：平成24年11月24日(土)15時00分～
会 場：岐阜市科学館プラネタリウム
演 題：「宇宙100の謎」
参加者：113名

1.主な内容

- ・金環日食、皆既日食、部分日食について
- ・太陽系、惑星、地球や月の成り立ち

2.実施の様子

配布資料にあった電波望遠鏡での日食の写真は、通常は見る事ができない太陽と月を同時に撮影されたものであり興味深いものでした。福井氏は地球と月の距離が変化していることに触れ、ゆくゆくは金環日食しか見られなくなることを話されると、参加者はとても興味深く聞いてみえました。太陽系の成り立ちなど、長い時間の中で宇宙が大きく変化していることを知ることができました。

福井氏は、「参加者からの質疑応答をはじめに行い、参加している人の傾向をつかみたい。傾向に応じて講演の内容を変えていこうと思う。」と話してみえました。市民の方の素朴な疑問に寄り添い、天文学者の立場で答えていくことをライフワークとしている姿勢がすばらしいと感じました。

月についての質問から、宇宙の広がりまで多岐に渡る質問に対し、福井氏は丁寧に答えていただけました。



普段聞くことができない天文学者の講話を通して、科学に対する興味・関心の高まりが生まれた天文講演会となりました。

(岐阜市科学館 加藤浩幸)

第134回

岐阜県博物館協会公開講座報告 「中尊寺の文化財と白山祭礼」

期 日：平成24年11月18日(日)
会 場：白鳥文化ホール

白山国立公園指定50周年協賛事業として、岩手県平泉中尊寺執事の破石澄元氏を講師に、郡上学 第3回白山文化ゼミナール「白山信仰と奥州藤原氏」が行われました。

奥州藤原氏の祖ともいえる藤原清衡は、7歳のときに父を前九年の役で失い、清原家の養子となりました。後三年の役を勝ち抜き清原家の当主となると、姓を藤原に戻し、その後100年続く奥州藤原氏の礎を築きました。

奥州藤原氏は白山信仰に深く傾倒していたといわれ、会場となっている旧白鳥町にも三代藤原秀郷が寄進したとされる銅造虚空菩薩坐像が残されています。



中尊寺にはいくつかの白山祭礼が取り入れられています。たとえば、世襲が認められる中尊寺では、7歳になった稚児が将来住職になる者としてお披露目をする儀式が挙げられます。また、1月1日～8日まで行われる、1年の豊穡を祈念する修正会(しゅうしょうえ)は、白山でも1月7日に行われています。

中尊寺には金色堂をはじめとする29件、およそ3200点の国宝・国指定重要文化財があります。一切経は一行おきに金字と銀字で書写するため、大変な手間と労力が費やされました。

金色堂の紹介はDVDで行われ、映像を通して華麗さと芸術性の高さがうかがえました。

会場には約320名の参加者があり、地元白鳥町と平泉とのかかわりへの関心の高さがうかがえる講演会となりました。

(機関紙委員 岐阜市歴史博物館 吉田晋右)